

同窓生 シリーズ ④



第30回生 岡崎 律子さん

作詞作曲家・歌手
青山学院女子短大
専攻科英文専攻卒
最新CD

「For フルーツバスケット」
(CD番号:KICM-3014)
'01.7/25発売

<http://www.jah.ne.jp/marc/>にて
「岡崎律子Book」公開中

まだ学生のころだったか、言われたことがありますが。ひとりの人の人生のうちで、「いつ、したか」は大した問題ではなく、「なにを、したか」が重要なのだと。

このセリフは、いろんな面で人より「遅かった」私を、たいへん勇気づけた。今もときどき想ってみる好きな言葉です。九十三年にデビューアルバムが出るまでも、私の在り方はなんというか実に曖昧で頼りないものだった。本人は淡々と

だ目の前のひとつひとつの曲に取り組み、それが形になればその都度うれしい、という日々だったけれど、身近にいた両親などは「この人、一体なにやってるの？」とずっと思っていたことだろう。それはたぶん今もそうだと思ってくれる、結婚のことや世間体など、常識派の彼らはいろいろと気にしてもいたはず。まあ、たまにはつつつかれたような気もするけれど、結局は怒ったり早くしろとも言わず見てきてくれた

ことに、今となってはただただ感謝、です。早くからヴィジョンをもちまっすぐそこへ向かう人もあれば、私のように実行し実感しながら知っていくという「遅い」タイプもいる。そしてそこに理解者がいてくれることで、臆することなくそれぞれのペースで自分の道を見つけていけるのだらうと思っています。現在の私の仕事は主に、作詞作曲という全くひとりの部屋での時間と、その後のレコーディングと

いう、これはいろんな人たちとの共同作業です。作るのにはまず締切りがあり、本当は一時にひとつの仕事というのが理想ではありますが、なかなかそううまくはいかない。暇な時は死ぬほど暇なのに、重なる時には重なります。そしてそんな時に限って詞が一行も出てこないなんてことも。苦しいとウロウロするわ、電話のコードは抜いてしまおうわ、あげくの果てに今しなくていい事をし始める……まさに誰にも見られてはならない鶴の機織り場です。そしてスタジオの中というのも、人はたくさんいるけれど対外的には密室。スタジオ機材の進歩は著しく、いろんな事をやっつけていきます。すべての歌手が完璧に上手いな

て信じちゃあいいけません。例えば、ちよつと下手くそな人のヴォーカルを録ったあと音程を直す、何度か歌ったうちの良い部分だけをつぎはぎにして一曲に仕上げる、なんでも機械の得意技(もちろん皆が皆そうではありませんが、念の為)。そんな小細工だけでなく、一曲が出来上がるまでには戦いもあります。小さな衝突や口論の時に不機嫌を見せたり黙ってしまつてはダメだといふのも、今さらながら実感していること。根気よく誠実に自分を出していくこと、相手を決してあきらめてしまわないことは、必ずいいものを生む。それで苦しみと歓びを繰り返すのならOK。なによりも、達成感がまた次への原動力になるから。



自分の選んだ道は時に誇らしく思え、時には人の進んだ道のほうが素敵に羨ましく思える。でも、たぶんそれは誰にとっても、どんな道へ進んだとしても同じだろう。スタートが遅い分、私の人生の今後はまだまだ忙しくなっていくはずなので、油断しないで、毎日を新しく頑張つて生きていきたいです。そしていつか、人の記憶に残るものを作りたい。あなたにも、忘れられない曲がありますか？